

■ PCN だより

PCN Volume 66, Number 3 の紹介

2012 年 4 月発行の Psychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) Vol. 66, No. 3 には, Review Article が 1 本, Regular Article が 8 本, 掲載されている。今回はこの中から外国から投稿された 6 本の内容と, 日本国内からの論文については, 著者をお願いして日本語抄録をいただき紹介する。

(外国からの投稿)

Review Article

1. Insight in schizophrenia: From conceptualization to neuroscience

M. Ouzir, J. M. Azorin, M. Adida, D. Boussaoud and O. Battas

Laboratory of Clinical Neuroscience and Mental Health, Faculty of Medicine and Pharmacy, Casablanca, Morocco

統合失調症の病識: その概念化から神経科学まで

病識欠如は, 統合失調症患者に広く認められ, この疾患の大きな特徴である。病識あるいは統合失調症の病識欠如についてはこれまでも多くの議論がなされており, その定義も様々になされてきた。病識についての現在の理解は, 心理学的・神経心理学的・器質的要因により形成される多次元的な現象であり, 測定可能で治療可能と考えられている。統合失調症患者は非道徳的行為, 抑うつ, 自殺企図など目立つ症状を呈するが, これらの症状は直接あるいは間接に病識の欠如に関係していることから, 統合失調症患者のより良い治療には, 患者の病識について検討を進めることが重要である。病識の検討には様々なアプローチがありうる。精神病理学的な検討, 認知機能障害, 解剖学的なレベルでの検討もありうるが, 多方面にわたる文献上に拡散しており, 病識

の検討に焦点を当てた統合的な研究はきわめて少ない。本論文の目的は病識に関する多数の文献を検討し, 病識についての多次元側面, 測定法, 神経心理学, 社会的影響に焦点を当ててレビューすることである。また病識欠如による認知機能障害と病識欠如の神経生物学的発症機序を解明するための脳機能画像法についてもレビューする。

Regular Articles

1. Predictors of dropout among personality disorders in a specialist outpatients psychosocial treatment: A preliminary study

F. Martino, M. Menchetti, E. Pozzi and D. Berardi
Institute of Psychiatry, Bologna University, Bologna, Italy

パーソナリティ障害患者の心理社会的専門外来治療プログラムからの脱落を予測する因子について

【目的】本研究の目的は成人パーソナリティ障害に対する心理社会介入プログラムの 1 年間の維持率に影響する因子を同定することである。【方法】対象者はボローニャメンタルヘルスセンターにおける 2003~2008 年の外来プログラムに登録された成人のパーソナリティ障害患者である。プログラム開始時に, 患者は社会的背景, 診断面接, 自記質問紙により評価された。プログラムを終了した患者と途中で脱落した患者とについて後方視的に比較検討した。【結果】登録患者 39 名中, 20 名 (51.3%) が脱落し, 19 名 (48.7%) がプログラムを終了した。20 名の途中で脱落者のうち 14 名はプログラム開始 2 ヶ月以内に脱落した。脱落群と終了群の間には, 診断 (境界性パーソナリティ障害), 背景因子 (年齢, 精神科介入の時期), 臨床症状 (衝動性), 主観的体験 (動機

づけ、介入への期待感、治療関係、介入に対するバリア) に大きな違いがあり、境界性パーソナリティ障害と主観的評価とが、途中脱落を予測する因子であった。不満足な治療関係と外的問題を申告する境界性パーソナリティ障害患者はプログラムから脱落する割合が高かった。【結論】途中脱落を予測する因子が同定され、臨床において重要な意味を持つと思われた。介入が不十分との主観的経験を有する境界性パーソナリティ障害患者をプログラムに維持するための努力が必要と考えられた。

2. Psychological health and coping strategy among survivors in the year following the 2008 Wenchuan earthquake

J. Xu and Y. He

Uncertainty Decision-making Laboratory, Sichuan University, Chengdu, China

2008年文川(Wenchuan)地震生存者の心理的健康と対処方法

【目的】2008年5月12日中国四川省文川の大地震は大きな被害をもたらした。この壊滅的地震は環境破壊だけでなく、被災地の人々の心にその後も長く続くストレスと問題を引き起こした。本研究では、生存者の性別、被災程度ごとに、対処方法と心理的満足度との関係を明らかにすることを目的とした。【方法】被災した19地方の被災者2080名が本研究に任意に参加した。参加者について、自記式心理質問紙、Short-Form-12、コーピング尺度の結果を集計して、震災後の精神症状と関連する対処因子を同定した。【結果】4つの主要因子(中年、低教育歴、低月収、高い被災)が低い精神的健康度と関連していた。被災の程度が高かった者は、被災の程度が低かった者と比較して、問題回避、空想、自己非難、援助の要求が有意に高かった。女性は男性と比較して脆弱であり、問題回避と自己非難の項目が高かった。6種類の対処法が主要な決定要因であり、精神的健康の64.2%を説明していた。【結論】災害後の精神的健康回復への介入には、特に女性に対する早期同定、継続するモニター、持続的な心理社会的支援、メンタルヘルスサービスが重要である。

3. Changes in oxidative stress and cellular immunity serum markers in attention-deficit/hyperactivity disorder

M. F. Ceylan, S. Sener, A. C. Bayraktar and M. Kavutcu

Department of Child and Adolescent Psychiatry, Dr Sami Ulus Children's Hospital, Ankara, Turkey

ADHD患者の酸化ストレスと細胞免疫を示す血清マーカーの変化

【目的】ADHDはいまだその発症病理が解明されていない発達障害である。現在の理解では、この疾患を惹起する主要要因として前頭前野のドーパミン欠如、中枢性のドーパミン系機能障害が言われているが、その機序については解明されていない。筆者らは、これまでも酸化ストレスと細胞性免疫の関与を主張してきた。本研究ではADHDと酸化ストレスの血清中マーカーである一酸化窒素合成酵素(NOS)、キサンチンオキシダーゼ(XO)、グルタチオンS-トランスフェラーゼ(GST)、パラオキソナーゼ-1(PON-1)と細胞性免疫のマーカーであるアデノシンデアミナーゼ(ADA)活性との関係を検討した。【方法】対象はDSM-IV-TRにより診断されたADHDの子供と思春期例35名である。対照として健常者35名についても比較検討した。静脈血のNOS, XO, GST, PON-1, ADA活性を測定した。【結果】患者群のNOS, XO, ADA活性は対照群と比較して有意に高値であった。患者群のGSTとPON-1は対照群と比較して有意に低値であった。【結論】ADHDの発症病理過程には酸化代謝と細胞性免疫とが関与している可能性がある。

4. Validation of apathy evaluation scale and assessment of severity of apathy in Alzheimer's disease

C-J. Hsieh, H. Chu, J. J-S. Cheng, W. W. Shen and C-C. Lin

School of Nursing, College of Nursing, Taipei Medical University, Taipei, Taiwan

アパシー評価スケールの妥当性とアルツハイマー病のアパシー評価について

【目的】アパシーはアルツハイマー病の主要症状の1つである。本研究の目的は Apathy Evaluation Scale, clinician version (AES-C) 台湾版の妥当性を評価し、アルツハイマー病患者についてのアパシーを評価することである。【方法】アルツハイマー病患者 144 名について評価した。本研究は横断的研究であり、AES, MMSE, NPI, CDR について評価した。【結果】AES-C 評価尺度の3日後のテスト-リテストの一致率は Cronbach の α 係数で 0.85 であった。AES-C 得点は NPI のアパシー得点とよく相関しており、その臨床的妥当性が示された。因子分析では主要3因子が抽出された。また、AES-C 得点と NPI の不安得点との相関からその妥当性が支持された。AES-C 得点は NPI の抑うつ得点とは相関しておらず、NPI の多幸得点とは負の相関を示していた。アルツハイマー病の中等症患者 (CDR=2) は、軽症患者 (CDR=1) より高い AES-C 得点を示していた。【結論】AES-C は台湾のアルツハイマー病患者におけるアパシーの評価に用いることのできる信頼性と妥当性を有する尺度である。

5. Cognitive changes in topiramate-treated patients with alcoholism: A 12-week prospective study in patients recently detoxified

S. Likhitsathian, P. Saengcharnchai, K. Uttawichai, J. Yingwiwattanapong, A. Wittayanookulluk and M. Srisurapanont

Department of Psychiatry, Faculty of Medicine, Chiang Mai University, Thailand

トピラメート治療によるアルコール症患者の認知機能変化: 12 週間の前方視研究

【目的】アルコール依存から脱却したばかりの患者についてトピラメートによる治療を行い 12 週間後の認知機能を調べた。【方法】対象は DSM-IV によるアルコール依存症患者であり、トピラメート治療開始から 14 日以内に退院した患者である。トピラメート用量は 50~300 mg/日であり、0, 29, 57, 85 日後に Montreal Cognitive Assessment (MoCA) により認知機能を評価した。この4点の MoCA 総得点と7項目の得点とについて比較検討した。【結果】38名の患者(男性36名, 女性2名)は 43.1 ± 8.6 歳であった。患者は登録時に断酒後 11.5 ± 5.3 日であった。5名, 1名, 3名がそれぞれ 29日, 57日, 85日後に脱落した。平均トピラメート用量は 253.1 ± 60.8 mg/日であった。アルコール摂取量は経過観察中に大きく減量し、それぞれの評価時期において 75~80% の患者が断酒を続けていた。85日後の MoCA 総得点, 言語得点, 遅延再生得点は登録時より大幅に上昇しており、それぞれ 22.0 ± 4.7 から 24.7 ± 3.4 ($P < 0.01$), 1.1 ± 1.0 から 1.3 ± 1.0 ($P = 0.03$), 2.7 ± 1.7 から 4.1 ± 1.0 ($P < 0.01$) へと改善していた。【結論】アルコールから離脱したばかりの時期にトピラメートで治療された患者は、特に言語機能や遅延再生における認知機能の改善を示す。この現象は、トピラメートによる認知機能改善というよりは断酒による認知機能改善の効果を増強することによりもたらされると考えられる。

(文責: 武田雅俊 PCN 編集委員長)

(日本国内からの投稿)

Regular Articles

1. Relationships between exploratory eye movement dysfunction and clinical symptoms in schizophrenia

M. Suzuki, S. Takahashi, E. Matsushima, M. Tsunoda, M. Kurachi, T. Okada, T. Hayashi, Y. Ishii, K. Morita, H. Maeda, S. Katayama, T. Otsuka, Y. Hirayasu, M. Sekine, Y. Okubo, M. Motoshita, K. Ohta, M. Uchiyama and T. Kojima

統合失調症における探索眼球運動異常と臨床症状の関係

【目的】統合失調症の生物学的指標を見出すため、多くの精神生理学的検査について研究が行われてきた。探索眼球運動 (EEM) 検査は、被験者が幾何学的な図形を自由に見ている際の眼球運動を評価する方法である。Suzuki ら (2009) は、EEM を用いて統合失調症と非統合失調症の判別を試みた。その結果、臨床的に統合失調症と診断された患者の 73.3% を統合失調症と判別することができた。本研究では、EEM で統合失調症と判別された統合失調症患者 (SPDSE) と非統合失調症と判別された患者 (SPDNSE) の特徴について検討した。【方法】Suzuki ら (2009) の研究に参加した 251 名の統合失調症患者のデータを用い、SPDSE 群と SPDNSE 群の患者背景および症候学的特徴について調査した。症候学的特徴の検討には、全被験者の簡易精神症状評価尺度 (BPRS) について因子分析を行った。【結果】BPRS の因子分析の結果、統合失調症の臨床症状に関して 5 因子を得た (興奮/敵意, 陰性症状, 抑うつ/不安, 陽性症状, 解体)。SPDSE 群は SPDNSE 群と比較し、興奮/敵意, 陰性症状, 解体の 3 因子の因子得点が有意に高かった。また、SPDSE 群は SPDNSE 群と比較し BPRS の総得点も有意に高かった。【結論】SPDSE が、興奮/敵意, 陰性症状, 解体が強い重度の統合失調症であることが示唆された。また、SPDSE は、この特徴を持つ亜型とも考えられた。統合失調症の異種性という面から考えると、この亜型を EEM で抽出することができ、EEM が異種性の単純化に寄与できる可能性が考えられた。

2. Impact of obsessive-compulsive symptoms in Tourette's syndrome on neuropsychological performance

N. Matsuda, T. Kono, M. Nonaka, K. Shishikura, C. Konno, H. Kuwabara, T. Shimada and Y. Kano

トゥレット症候群の神経心理学的な特徴に与える強迫症状の影響

【目的】トゥレット症候群 (Tourette Syndrome: TS) の神経心理学的な知見は一貫せず、その理由は主に強迫性障害などの併発症によるものとして議論されてきた。しかし、強迫症状の特定のディメンジョン、特に TS に関連のある攻撃性や対称性のディメンジョンに着目して神経心理学的な検討を行った研究は少ない。本研究の目的は、TS に関連のある特定の強迫症状が TS の神経心理学的な特徴に与える影響を検討することである。【方法】注意や実行機能を測定する神経心理検査バッテリーを 33 名の TS を有する患者と 18 名の健常対照者に実施した。攻撃性の強迫症状を有する TS 患者 (11 名) と、攻撃性の強迫症状を持たない TS 患者 (22 名) および健常対照者との間で、神経心理検査の成績を、年齢を統制した MANCOVA を用いて比較した。対称性の強迫症状を有する TS 患者 (14 名) と、対称性の強迫症状を持たない TS 患者 (19 名) および健常対照者との間で同様の比較を行った。【結果】攻撃性の強迫症状を有する TS 患者はそうでない者よりも保続エラーが多かった。強迫症状の全体的な重症度とチェックの重症度は神経心理検査の成績と関連しなかった。また、TS 患者における対称性の強迫症状の有無によって、神経心理検査の成績に有意差は見られなかった。【考察】TS 患者における神経心理学的な特徴は、強迫症状の全体的な重症度ではなく、TS に関連する特定の強迫症状に影響される可能性が示唆された。

3. Influence of self-efficacy on the interpersonal behavior of schizophrenia patients undergoing rehabilitation in psychiatric day-care services

T. Morimoto, K. Matsuyama, S. Ichihara-Takeda, R. Murakami and N. Ikeda

精神科デイケアに通所中の統合失調症患者の対人行動に対する自己効力感の影響

【目的】本研究では、精神科デイケアに通所中の統合失調症患者において、対人行動に関する自己効力感が対人行動に影響するか否かを検証した。【方法】39人の統合失調症患者に対して、精神障害者社会生活評価尺度の下位尺度“対人関係”(LASMI-I)、対人行動に関する自己効力感尺度、統合失調症認知機能簡易評価尺度日本語版(BACS-J)、陽性・陰性症状評価尺度(PANSS)による評価を行い、これらの間の関連性を解析した。【結果】LASMI-I得点と対人行動に関する自己効力感尺度得点、BACS-J総合得点、PANSS陰性尺度得点との間に有意な相関が

見られた。一方で、対人行動に関する自己効力感尺度得点とBACS-J総合得点、PANSS陰性尺度得点との間には有意な相関が見られなかった。上記により示された社会的側面、心理学的側面、臨床的側面間の因果関係を検証するため、対人行動に関する自己効力感尺度得点、BACS-J総合得点、PANSS陰性尺度得点を独立変数、LASMI-I得点を従属変数とした重回帰分析を施行した。その結果、対人行動に関する自己効力感尺度得点はBACS-J総合得点と共にLASMI-I得点を有意に予測していた。【考察】地域で生活する統合失調症患者において、対人行動に関する自己効力感は認知機能と同じく対人行動に寄与する要因であった。このことから、地域で生活し精神科リハビリテーションを受けている統合失調症患者の対人行動の改善を目指す上で、認知機能に対する介入と共に対人行動に関する自己効力感に働きかける介入が重要となる可能性が示唆された。

(精神神経学雑誌編集委員会)